

帰ってきた万知子は、私の顔をみて、無邪気と呼びかけます。若い命を感じさせる、はずむような声、そして肢体です。畳の上を踏んであるく足つきも、まるでピョンピョン踊りはねるようです。その足首をムズとつかむ。

そして、
「きゃっ」

という悲鳴をこころよく聞きながら、彼女を畳の上にひき倒す。それからねじふせて、鼻孔を畳に押しつけるようにして、畳のおいおいっぱいかがせてやる。それから……

——ああ、どんなにいいだろうな——

私は、部屋の中を動きまわる万知子を視線で追いながら、そんな妄想で、頭の中を熱くしていました。

そして、彼女が、私のそばをすりぬけてゆくたびに、その足首にムズと手をのばしそうになり、その衝動をこらえるのに、かなりの努力をはらわなければなりません。私と万知子のほかにだれもいなかったら、そして、あとのことを考えなかったら、私は、まちがいに、妄想を実行に移したでしょう。

そんなある日のことです。

私の脳天に、ガンと一発くらわされるようなできごとが、起こったのです。

その日は日曜でしたので、私は、おひるすこし前ごろから、万知子の家に遊びにいっていました。

主人は、庭で草取りをやっていますし、主婦は主婦で、日曜のひるをスペシャルの献立で楽しいものにしようという計画なのでしょう。台所へはいって、何かゴトゴトやっています。万知子の姉弟たちも、

それぞれ何か自分のことをやっています。

そして万知子は？

彼女が在宅していることは、ハッキリしていました。彼女の部屋から、渡辺トモコばりの、いせいのいい歌声がきこえてくるからです。「彼女、元気だな」

私は、胸がキューッと、もりあがりしました。

この日ごろの私は、そんなちよつとしたことからでも、彼女に対する鞭の恋情が、せつないまでにかぶってくるのです。

きょうも、彼女が生きていて、ゴハンをたべたり、ウンコをしたり、歌をうたったりしているという事実。ただ、その事実が、はてもなく私を刺激するのです。

そして私は、その歌声にひきよせられるように、フラフラと彼女の部屋に近づいてゆきました。

そのとき、パツと部屋から出てきた彼女とハチあわせしそうなったのです。

両方でびっくりしましたが、彼女は、

「なあんだ。おじさん、来てたのか」
それから、

「ちよつと待っててね。いいもん見せてあげるから……」

私を部屋に入れておいて、トイレにすつとんでゆきました。いきなり、シャーッという音でもきこえてきそうな、生理をムキだしにした無邪気さでした。

私は、万知子の、そんなところが好きでした。

いってみれば、子供っぽいグラマーということなのです。そんな点が、年少趣味の私の氣にいらっていたのかもしれない。

イキの合った芝居

——万知子のいないまに——

私は、部屋の中に散らばっている、彼女の体臭のついていそうなものに、大いそぎでひとわたりくちびるを押しあてました。

それは、彼女が、いつも腰かけているイスの布張りの部分、ちょうどお尻の割れ目がおつつかる場所だとか、足のあぶらのしみこんだスリッパだとか、腕ぎすられたソックスの片っぽうだとか、壁にかけられたチュニック・コート、それに細身のストラックスなどでした。

私は、胸をドキドキさせながら、それにくちびるを押しあて、クンクンにおいをかぎまわります。

そのしぐさは、とても、キスだなどといった上品なものではありません。まるで、熱した性器を押しあててもいるような、熱っぽい、そしてイヤらしいしぐさでした。じっさい、万知子が部屋にすぐ戻ってくる、という心配がなかったら、私は、そうしたかもしれないのです。

私は、一つ一つの品物にくちびるをつけながら、

「おれのものだ。おれのものだ。いまに万知子は、おれのものだ。だから、こうやってナメて、人に取らせないようしておくんだよ——」

心の中で、そんなことを叫びつづけるのでした。

足音がして、万知子が帰ってきました。

相手が、おじさんの私だものだから、彼女は、安心しきって、モゾモゾと腹のあたりで手を動かし、ふだん着のストラックスをひきあげる

ような動作をします。

——まだお尻が濡れているのではなからうか——

私は、そんなことを考えながら、いまにも彼女に襲いかかり、そのストラックスをひきおろして、まるい、白い、かわいらしい尻を、ムキだしにして、それを、パンパン、たたいてやりたい衝動にかられるのです。

万知子は、まさか、そんな私の下心を見すかしたわけでもないでしょうが、

「おじさん、こんど、あたし、乗馬クラブにはいったのよ」

そういうと、乗馬用のムチを出して、ニッコリしながら、私に見せたのです。

そのとき、私は、強烈なショックをうけたのです。彼女を鞭打ちたいという想念が、ある適確なイメージと肉感をもって、私の前に立ちあはだかっているのを見たような、ふしぎな心のときめきでした。

私は、頭がクラクラッ、としました。

いきなり、彼女からその鞭をうばいとって、びしっ、とやってやりたい衝動を、あやうく下腹のあたりでこらえました。

そして、無理に平静をよそおいながら、

「ふうん、乗馬をね。それはまた、ずいぶん変わったレジャーだなあ」
そんなことをいうのでしたが、顔がへんなくあいにひきつっているのが、自分でもよくわかりました。

万知子という子は、ちよつと変わったところがあって、なんでも、人のあまりやらないようなことをやってみたい、という気持だが、以前からあったようです。

それで、BGになって、さっそく、乗馬なんかはじめたのでしよう。